氏　　名	楊璇（ヨウ　セン）
学　　位	博士（中国言語文化学）
学位記番号	甲第174号
学位授与年月日	2023年3月23日
審査研究科	外国語学研究科
論文題目	明治期金國璞編纂北京語教科書の総合研究
論文審査委員	（主査）大東文化大学教授　丁　鋒
	（副査）大東文化大学教授　大島　吉郎
	（副査）大東文化大学准教授　吉田　慶子
	（副査）文教大学教授　山田　忠司

博士論文　審査報告

1・本人履歴、研究の経緯および研究業績

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされております。ご了承ください。

2．研究方法、論文の構成と内容

本論文（本文 193 頁、引用文献と付録 18 頁、全 211 頁）は次の章立てから構成されている。

序論

0.1　研究背景

0.2　研究範囲と研究意義

0.2.1　研究範囲
0.2.2　研究意義
0.3　先行研究
0.3.1 清末北京語の先行研究
0.3.2 金國璞関連先行研究
0.4　研究方法
0.5　論文構成
本論
上編　金氏教科書と著者関連研究
第一章　金國璞の教科書とその研究
1.1　金國璞編纂教科書
1.1.1　《北京官話：談論新編》
1.1.2　《士商叢談便覧》
1.1.3　《支那交際往来公牘－北京語直譯附》
1.1.4　《華言問答》
1.1.5　《改訂官話指南》（1903）
1.1.6　《虎頭蛇尾》
1.1.7　《北京官話：今古奇観》
1.1.8　《搢紳談論新集》（1907）
1.1.9　《華言分類撮要》（1907）
1.1.10　金氏教科書の内容特徴
1.2　教科書の改編研究
1.2.1　《支那交際往来公牘－北京語直譯附》（1902）
1.2.1.1 《支那交際往来公牘－北京語直譯附》と《支那交際往来公牘訓譯》
1.2.1.2 編纂目的
1.2.1.3 改編過程
1.2.2　《北京官話：今古奇觀》（1904、1911）
1.2.2.1 《北京官話：今古奇觀》と《今古奇觀》
1.2.2.2 編纂目的
1.2.2.3 改編過程
1.2.3　結論
1.3 金國璞の生涯とその研究
1.3.1　先行研究
1.3.2　共編者の研究
1.3.2.1　鄭永邦、呉啓太、呉泰寿
1.3.2.2 平岩道知

1.3.2.3 瀬上恕治
1.3.2.4　鎌田弥助
1.3.3 金國璞活動年表
1.3.4 結論
第二章　金氏編纂教科書の語法的研究
2.1 教科書における北京語特徴
2.1.1　「北京語における 7 項目の特徴」と金氏教科書言語の比較
2.1.2　「北京語に独特と思われる 12 語」と金氏教科書言語の比較
2.1.3 「北京語の文法特点」と金氏教科書言語の比較
2.1.3.1　代名詞
2.1.3.2　数詞・量詞
2.1.3.3　形容詞
2.1.3.4　動詞
2.1.3.5　介詞
2.1.3.6　副詞
2.1.3.7　助詞
2.1.4　結論
2.2　教科書の語彙研究
2.2.1 北京語語彙
2.2.1.1 北京語辞典に収録されている語彙
2.2.2 「アル化」語
2.2.2.1　出現頻度から見る「アル化」語
2.2.2.2　品詞別に見る「アル化」語
2.2.3 歴史語彙
2.2.3.1　清代典制用語
2.2.3.2　生活用語
2.2.3.3　軍事用語
2.2.4　慣用語
2.2.4.1 成語
2.2.4.2 “四字格”
2.2.4.3 諺
2.2.5　結論
上編結論
下編　教科書の語学比較研究
第三章　品詞論：《兒女英雄傳》との比較
3.1　形容詞の比較研究

3.1.1 性質形容詞
3.1.1.1 単音節性質形容詞
3.1.1.2 単音節性質形容詞の文法機能
3.1.1.3 二音節性質形容詞
3.1.1.4　二音節性質形容詞の文法機能
3.1.2　状態形容詞
3.1.2.1　AB 式状態形容詞
3.1.2.2　AA 状態形容詞
3.1.2.3 ABB 式状態形容詞
3.1.2.4 AABB 式状態形容詞
3.1.2.5 ABAB 式状態形容詞
3.1.2.4 状態形容詞の文法機能
3.1.3 結論
3.2　副詞の比較研究
3.2.1　程度副詞
3.2.2 範囲副詞
3.2.3 否定副詞
3.2.4 情態副詞
3.2.5　結論
3.3　文末語気助詞の比較研究
3.3.1 “啊”系
3.3.2 “呢”系
3.3.3 “麼”系
3.3.4 “罷”系
3.3.5 “來”系
3.3.6 その他の文末語気助詞
3.3.7 結論
3.4　まとめ
第四章　構文論：《兒女英雄傳》との比較
4.1 “叫”構文の比較研究
4.1.1　“叫”と“教”
4.1.2　“叫”構文の使役表現
4.1.2.1　指示使役文
4.1.2.2　誘発使役文
4.1.2.3　許容使役文
4.1.3　“叫”構文の受身表現

4.1.4 結論
4.2 “讓”構文の比較研究
4.2.1 “讓”の基本用法
4.2.2 “讓”構文の使役表現
4.2.2.1 指示使役文
4.2.2.2 誘発使役文
4.2.2.3 許容使役文
4.2.3 “叫”構文との比較
4.2.4 結論
4.3 “給”構文の比較研究
4.3.1 “給”の基本用法
4.3.1.1 動詞の文法機能
4.3.1.2 介詞の文法機能
4.3.1.3 助詞の文法機能
4.3.2 “給”構文の授与表現
4.3.3 “給”構文の使役表現
4.3.4 “給”構文の処置表現
4.3.5 “給”構文の受身表現
4.3.6 結論
下編結論
終論
1 本研究の成果
2 今後の課題
引用文献
既発表論文と各章の関係
付録

本論文は主に比較法、分析法、統計法、考証法、挙例法、製表法、データベース処理など言語研究の基本手法で考察を進めている。

全文は序論、本論（上編２章、下編２章）、終論の三部分から構成している。序論は研究背景、研究対象、研究範囲、研究方法を詳述し、本論文の章節配置及び内容構成を述べた。

本論の上編「金氏教科書と著者関連研究」において、第一章「金国璞の教科書とその研究」では教材研究の視点から版本、構成、内容、特徴について考察する上で、3 冊の改編教科書について改編経緯と改編方法を分析し、原作との比較研究を行った。第三節「金国璞の生涯とその研究」は先行研究を踏まえ、金氏の交友関係と教科書の共編者を考察し、「金國璞活動年表」を作成した。第二章「金氏編纂教科書の語法的研究」は北京語研究の権威である太田辰夫氏の論考に提示され

た清末北京語の特徴と比較し、品詞別の検討を試み、金氏教科書の言語表現は北京語の特徴を有するとの結論を導き出した。第二節「教科書の語彙研究」は複数の北京語辞典を参照し、金氏教科書に使用された方言語彙、アル化語、歴史語彙、慣用語に使用頻度を明示しながら考察した。下編「教科書の語学比較研究」においては、第三章「品詞論：《兒女英雄傳》との比較」では、歴時的な研究を通じて、清朝同治時代（1862－1874）成書の北京語白話武侠小説《児女英雄傳》と金氏教科書の両書における形容詞、副詞、文末語気助詞の使用状況を考察し、使用差異を突き止めた。第四章「構文論：《兒女英雄傳》との比較」は北京語の言語特徴を有する“叫”構文（使役義・誘発義・許容義・受身義）、“給”構文（授与義・使役義・処置義・受身義）、“讓”構文（指示使役文・誘発使役文・許容使役文）について比較研究を展開し、それぞれの使用状況と使用頻度を考察した。

終論は研究成果をまとめ、今後の研究課題を示した。

３．研究の成果および評価

本論文の研究成果は主に以下の四点にある。

（１）清末北京語語彙の研究成果。本論文は金氏教科書における北京語語彙を精査し、常用語彙（633 個）、アル化語（472 個、2899 例）、歴史語彙（468 個）、慣用語（893 個）などの使用を明らかにした。口語性の強いアル化語と慣用語などが頻繁に使用された特徴から、金氏教科書の口語性が証明されたことになる。

（２）清末北京語文法表現の研究成果。本論文は先行研究で示された北京語文法表現に比較を行い、品詞として代名詞、数詞、量詞、形容詞、動詞、介詞、副詞、助詞などに及んだ。また使用頻度を明示し、北京語の語彙史に有用なデータを提供し、参考に値する。

（３）清末北京語の通時的な研究成果。《兒女英雄傳》とデータ化による綿密な比較研究で「大同小異」の結果が得られた。形容詞、副詞、文末語気助詞、叫構文、讓構文など清末時代北京語の使用状況を細密に反映した研究成果は、北京語史の解明に学術的価値を与える。

（４）明治時代中国語教育の関連研究成果。本論文における金氏教科書研究、教科書共編者研究、教科書改編研究は日本の中国語教育史に貴重な成果を提供し、高い史料的価値が認められる。

４．結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（中国言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。